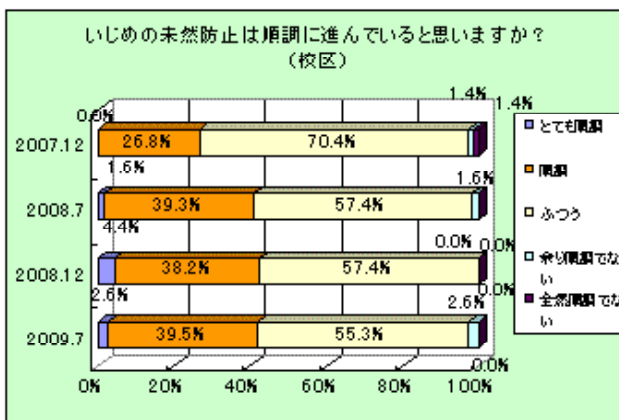
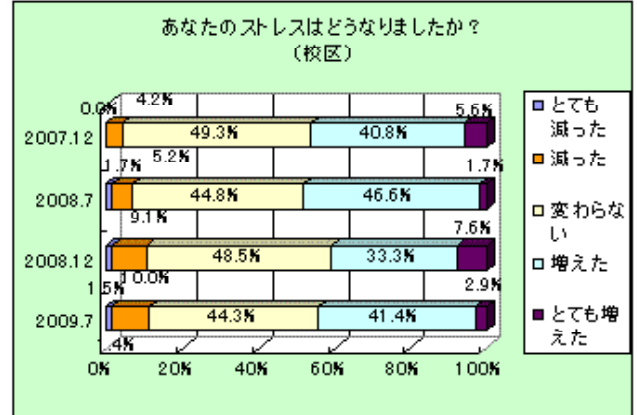
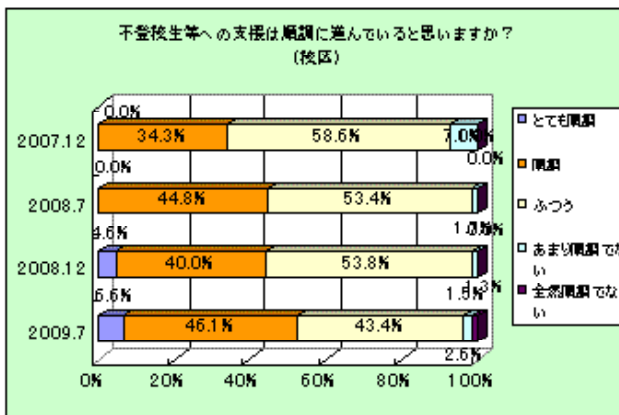
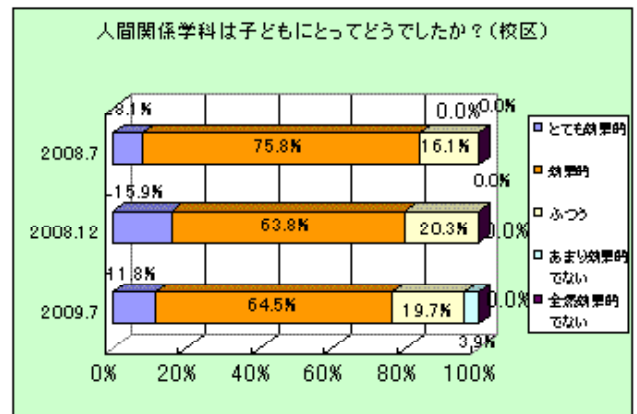
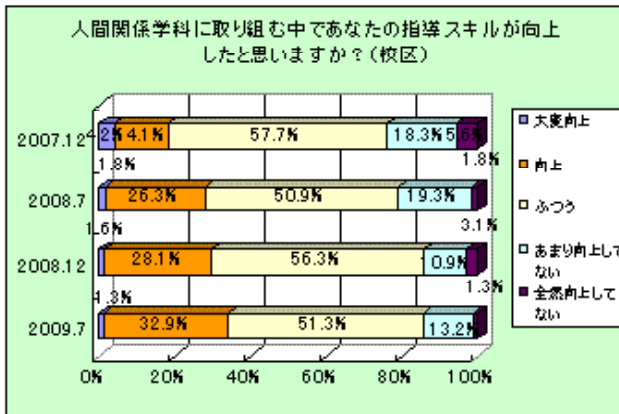
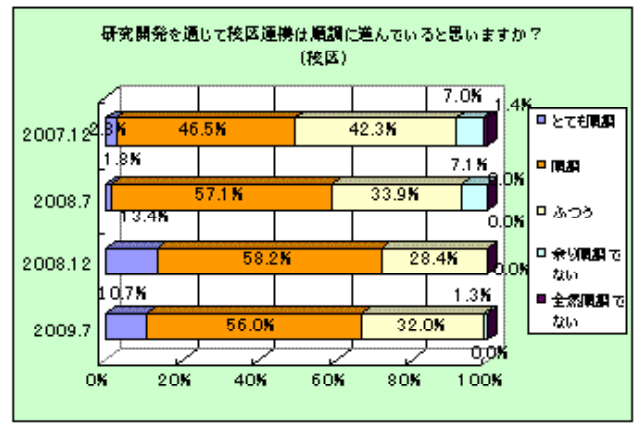
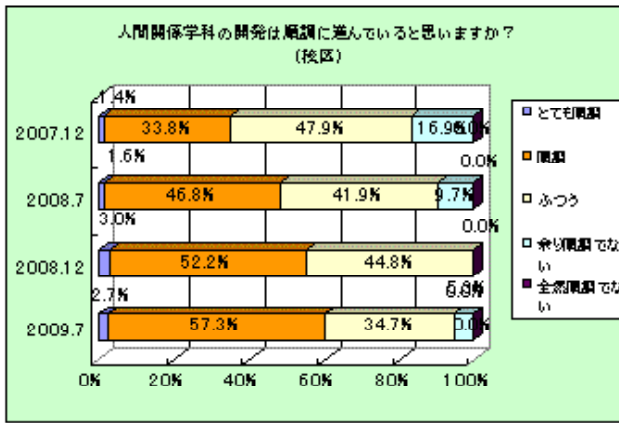
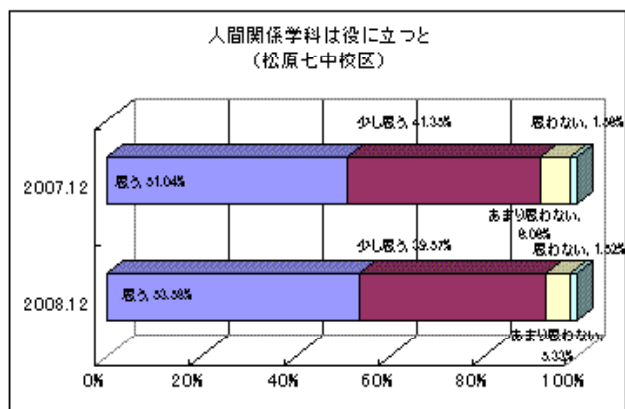
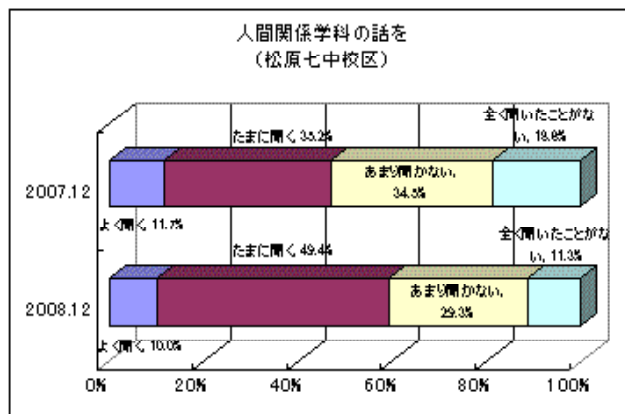
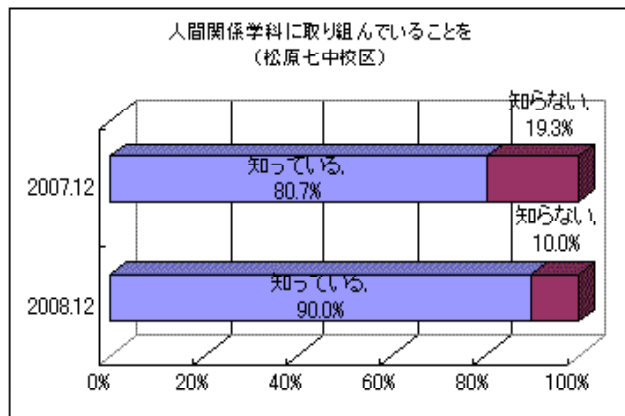


2. 教員のアンケートから



これまで、2007年12月、2008年7月、12月、2009年7月と恵我小・恵我南小・松原七中・(恵我幼稚園)の教員を対象に研究開発アンケートを実施した。その中から研究開発の中心課題に関わる3項目について見ていくと、3項目ともに本年度になって、「とても順調・順調」の項目の数値が階段状に増えているのがわかる。まだまだ、3校間の温度差があるとは言え、研究開発はほぼ順調に進んできていると言える。特に2008年9月から11月にかけては、校区内で学校を越えた教員の交流を様々なレベルで数多く持ったこともあり、研究開発の校区としての進展を多くの教員が感じている。

3. 保護者のアンケートから



2007年12月、2008年12月と2回にわたり、松原七中校区保護者対象にアンケート調査を行った。「人間関係学科に取り組んでいることを知っていますか？」という質問に関しては、約10ポイント上昇し90%の保護者の認知を得た。「人間関係学科の話を家庭で子どもから聞いたことがありますか？」という質問では、約12ポイント上昇し約60%の保護者が「よく聞く、たまに聞く」と答えている。そして、「人間関係学科は生活に役立つと思いますか？」という質問に至っては、約2ポイントの上昇ではあるが、全体で93%の保護者が「思う・少し思う」と答えている。文章表記の部分では、学校に対して「素晴らしい時間だと思っています。」「いつも新しい工夫をされ、その時々に応じてタイムリーだと

思うような内容を開発されていることに驚き、感激しています。」「将来ずっと続いていく人間関係、人と人のつきあいが一番大切で難しいと思います。」「勉強以外の大切な取組を経験させて欲しいと思います。」「などの肯定的評価の意見がほとんどを占めていた。しかし、ほんの一部ではあるが、「時間割をさいてまで教えなければいけないことでしょうか？」などという誤解に基づいた否定的意見もあったが、明らかに学校側からの説明不足が原因であり、アカウンタビリティーの徹底が問われていることがわかる。

・ 研究開発実施上の問題点及び今後の研究開発の方向

1. 実施上の問題点

校区で一貫した取組をめざし、継続した内容創造のための、校内・学校間の諸会議の設定の難しさ。

教員間、学校間における意識の違いを、プラスに作用させることの難しさ。

校区での成果を客観的に評価し、成果を発信しつつ内部に返していくことの難しさ。

2. 今後の課題

七中校区として11年間のカリキュラムづくりを行う。本年度明らかになった人間関係学科の主になる領域を、いかに順序立てて配列し、中学校3年生の最終段階にもっていくかということ、校区の教員全員で考え、人間関係学科実施の指針を作成する。

校区としての不登校生等支援といじめの未然防止に関わって、校区で一貫した取組を定着させる。

効果測定に関して、本年度小学校で根づいてきたデータ収集と基礎データづくりを、各校の課題を明らかにしていくための、積極的効果測定へと移行させていく。

人間関係づくりを地域のものとしていくために、地域人材の活用や、地域への発信を行う。

子どものファシリテータとしての資質向上をはかるための研修を実施する。

研究開発の内容に普遍性を持たせていくために、諸研究会への積極的な参加や、松原七中校区研究開発HP

(<http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/matsu7/08koukukenpatsu/koukuhyoushi.htm>)

等を活用し、外部と連携を図る。